

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00449

研究課題名(和文)メディアがつくる感受性の文学とイギリス十八世紀末女性詩人

研究課題名(英文)Literature of Sensibility formed by media with a focus on late
eighteenth-century women poets

研究代表者

田久保 浩(TAKUBO, Hiroshi)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・教授

研究者番号：20367296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：1788年より、新聞紙上に発表した「感受性」影響の顕著な作品で詩人としての地位を築いていったメアリー・ロビンソンに焦点を当て、自由の主題の表現、および、ギリシャ神話のプロメテウスのモチーフにおいて、シェリーら、ロマン派先駆けと位置づけられることを示した。次に、フランス革命の同時代記者として知られるヘレン・マリア・ウィリアムズの韻文、散文と、ワーズワースやシェリーとの思想的、文学的親近性について、特に、ウィリアムズの訳したフランスの地質学者、政治家ラモン・ドカルボニエールのテクストを介して検証を行い、想像力の概念の理解において、ワーズワースらと共通の立場に立っていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

イギリス・ロマン派研究は、いまだに6人の中心的な男性詩人の作家論、作品論として行われることが多いが、今回、メアリー・ロビンソンとヘレン・マリア・ウィリアムズを中心に行った研究は、自由と想像力の概念において、後のロマン派とははっきりとした連続性がみられることを明らかにした。一連のメディア・ディスコースとして、1790年代のフランス革命への反動としての政治的抑圧の流れを考察しながら、女性作家たちの文学を検証することで、イギリス・ロマン派の文学を女性作家らも含めた一連の影響関係の中に位置づけることの必要性が明らかとなり、それによりこの時代の文学の実像に近づくことへの可能性が示された。

研究成果の概要(英文)：The first part focused on Mary Robinson. By analyzing her response to the French Revolution in its spirit of liberty and in her use of Promethean myth, the research identified an origin of the revolutionary visions found in Percy Shelley, in Robinson. The second part established Helen Maria Williams as an important predecessor to William Wordsworth in the literature of the imagination. By an analysis of Helen Maria Williams's poetry and prose, especially her translation of Ramond de Carbonnieres's "Observations on the Glaciers and the Glaciers," which had a strong influence on Wordsworth, in comparison with the translation of the same text by William Coxe, Williams's understanding of the idea of the imagination is shown to have a remarkably strong affinity with that of Wordsworth's. The study as a whole supports the view that English romanticism emerged as an interiorization of the political idealism of the women poets of the revolutionary period.

研究分野：イギリス文学、メディア研究

キーワード：イギリス文学 18世紀 女性作家 メディア 詩 フランス革命 Sensibility

1. 研究開始当初の背景

本研究に先立つ科研研究課題「十八世紀イギリス新聞投稿詩におけるライター・読者共同作業」においては、新聞投稿誌が文学上の大きな動きを作った例として、1780年代後半のデッラクルスカ派に焦点を当てた研究を行った。これは、ロバート・メリーのデッラクルスカという名による新聞掲載詩に対して、劇作家ハナ・カウリーが同じくアナ・マチルダというイタリア風のペンネームを冠した詩で応えたことに端を発する。クルスカ派の中で特に、のちにキーツやシェリーらに影響を与えたと思われるローラ・マリアこと、メアリー・ロビンソンに注目した。ロバート・メリーやロバート・サウジーらとともに、パーシー・シェリーの政治詩への影響として、以前よりフランス革命期の文学と1810年代以降の後期ロマン派文学との関係を探っていたからである。同時にロビンソンの作品が生まれた背景として、バーボールド、シュワード、スラールら、社会的に尊敬を得ていた18世紀の女性作家、知識人たちがあり、彼女らの活躍を可能とした女性たちの文学活動を促す出版文化があったことがわかってきた。しかしながら1790年代、革命後の反動の嵐の中でウォルストンクラフト、ヘレン・ウィリアムズら女性作家の声は、ほかの革命に好意的なリベラル派知識人らとともにかき消されてゆく。ワーズワースらのイギリス・ロマン派の詩人たちが知られるようになるのは言論抑圧の後の、まったく変遷した文化状況のなかであった。18世紀の女性作家を見過ごす20世紀以降の文学史観にもこの言論抑圧の跡を残していることは、ジェローム・マッグンら、近年の研究で指摘されるところである。そこで、出版メディアという観点から、イギリス社会のイデオロギー上の転換期である1790年代をまたいで、その時代の女性作家たちと、ロマン派作家たちとの関係について探ろうというのが研究の背景であった。

2. 研究の目的

感受性の文学の受容についての歴史的变化について探る本研究が、時代の転換点として注目するのが1790年から1795年の時期である。フランス革命への反動として、1790年代を通じて、革命に好意的だった政治改革論者、リベラル派に対する政策的言論弾圧、社会的排除、攻撃が組織的に行われる中で、18世紀には、感受性が社会的な徳として、また女性において優れた徳として認められていたものが、女性の社会的発言を厳しく批判し、封じる言説が支配的となる中で批判的に見られるようになる。研究目的は二つに絞ることができる。第一の目的としては、反動的な政治的風潮の中で、感受性の文学批判と、女性蔑視の言説が一体のものとして進行し、またその感受性文学、女性作家の文学への過小的評価が19世紀以降維持される過程をとらえることである。そして第二には、これら18世紀感受性の文学、女性作家たちの文学が、感覚、思想、表現において、ワーズワース以降のロマン派詩人たちに継承されていること、あるいはそこでの変化について検証することである。ロマン主義の文学とは、感受性の文学が政治弾圧による厳しい抑圧を受けたことから、革命の理想を内面化し、新しい文学として自らを提示したという仮説を前提としている。18世紀末の女性作家の重要性を否定する言説が強まった理由を解明することと同時に18世紀女性作家たちとそれに続くロマン派作家たちの連続性への認識を高めることは、これら女性作家たちとロマン派作家たち、両方への理解を深めることになる。また、1790年代イギリスの文化史的変化の過程を明らかにすることは、のちの時代の文化的変化とメディアとの関係についての知見を高めることにも通じる。

3. 研究の方法

感受性の文学が最高潮に達したデッラクルスカ派に同調し、新聞発表の詩で詩人としての認知を高めたメアリー・ロビンソンに焦点を当て、感受性の感覚から自由の理想への発展の過程を検証する。感受性の文学が新聞というメディアを通して「デッラクルスカ派」のブームを起こすことになった中心人物ロバート・メリーを出発点として、彼とフランス革命の理想について共感するメアリー・ロビンソンの二人の間の詩の交換に焦点を当て、感受性の詩の発展の過程をたどる。特に『自由の桂冠』と『世界はかく進む』に注目する。次に、その後の政治的反動の時代を経て、感受性の思潮がどう後のロマン派に受け継がれてゆくのかという問題について、シェリーら、ロマン派の作品との比較を試みる。

もう一人、シェリーに影響の見られる18世紀女性詩人として、フランス革命の展開についての同時代記録者として知られるヘレン・マライア・ウィリアムズの1780~90年代の韻文、散文を取り上げる。まず、ウィリアムズの『スイスの旅』と比較すべき点の多いパーシー・シェリー、メアリー・シェリーの『六週間旅行記』に注目し、両社の比較を行う。

ワーズワースやシェリーとの思想的、文学的親近性について、特に、ウィリアムズの訳したフ

ランスの地質学者、政治家ラモン・ドカルボニエールのテキストを介して調べる作業を行う。ワーズワースやバイロンにも影響を与えたカルボニエールについて、フランス語の資料を含めて調査を行う。この検証作業により、ウィリアムズらの感受性の女性詩人たちとワーズワースらロマン派作家たちとの思想上、表現上の親近性を明らかにしたい。散文『スイスへの旅』(1798)と『フランス共和国における習慣と世論』(1801)とワーズワースやシェリーのテキストを比較し、両者の想像力論と政治観について検証する作業を行う。これによりウィリアムズらの思想、詩的表現が、言論弾圧の時代を経て、ワーズワースやシェリーに異なった形で受け継がれた過程を明らかにすることをもくろむ。

4. 研究成果

(1) 「ロバート・メリーとメアリー・ロビンソン：フランス革命と感受性の詩」(田久保浩, 徳島大学総合科学部言語文化研究, Vol.28, 1-19, 2020)において、ロバート・メリーとメアリー・ロビンソンに焦点を当て、作品内で相互に応答しつつ綴られるデラクルスカ派の奇抜大胆な恋愛歌がフランス革命の理想という政治的テーマにおける共感へと発展を見せる過程を検証した。その中で、フランス革命に人類の未来への希望を見る二人の詩人に、後のワーズワース、シェリーらのロマン派詩人と共通の主題や特徴があり、これまで研究者たちが考える以上に大きなつながりが見られることを指摘した。特に、自由の主題の表現、および、ギリシャ神話のプロメテウスのモチーフの使い方において、シェリーら、ロマン派先駆けと位置づけられることを示した。

上記論考中に言及した事実として、哲学者ウィリアム・ゴドウィン、ホーン・トゥックやジョン・セルウォールら政治的急進派に広い交友関係を持っていたことで知られる。大英図書館での調査、インターネット公開のウィリアム・ゴドウィン日記資料から、フランス革命後、ジャコバン思想に傾倒していったメリーとは、1793年に知り合った。そしてそのメリーから1796年ごろメアリー・ロビンソンを紹介されたことがわかった。メリーとロビンソンとの結びつき、および当時の改革は知識人のネットワークを裏付けるものである。

(2) 一方ウィリアム・ピットのスパイ網を用いた言論弾圧政策と革命に対する反動的思潮について示す資料として、イギリス、国立公文書館に所蔵の内務省ファイルにセルウォールの *On the Moral Tendency of a System of Spies and Informers and the Conduct to be Observed by the Friends of Liberty* と題する50ページほどのパンフレットを発見し、研究中である。この成果は未発表であるが、ピット政権下でのイギリス全土を網羅する言論抑圧のためのスパイ網の存在と機能について、書評で紹介した Kenneth R. Johnston, *Unusual Suspects: Pitt's Reign of Alarm and the Lost Generation of the 1790s* (日本シェリー研究センター年報, Vol.30, 10-14) およびその他の社会史研究を裏付けるものである。

(3) 「シェリーの“Mont Blanc”とヘレン・マライア・ウィリアムズ」(田久保浩, 徳島大学総合科学部言語文化研究, Vol.29, 39-57, 2021)において、フランス革命の展開についての同時代記録者として知られるヘレン・マライア・ウィリアムズの『スイスへの旅』(1798)と「モンブラン」が発表されたメアリー・シェリー、パーシー・シェリーによる『六週間旅行記』(1817)に焦点を当て、1790年代のウィリアムズと1810年代のシェリーとの作家としての思想上、表現上の親近性を明らかにした。シェリーの詩にはウィリアムズの韻文からのエコーが聞き取れることを指摘し、自然を見つめる態度に、フランスの自然史家カルボニエールへの理解を介して、共通の思想を発見した。

(4) ウィリアムズの翻訳したフランスの地質学者、政治家ラモン・ドカルボニエールのテキストについて調べた。カルボニエールの文章は、ワーズワースの *Descriptive Sketches* に影響が濃だけでなく、ワーズワースが書簡中でバイロンの『貴公子チャイルド』第3巻のアルプスの自然描写をカルボニエールの剽窃だと非難した重要なテキストである。これまでロマン派研究でほとんど知られていないカルボニエールについて、フランス語の原文を精査すると同時に、アラン・グユイヨ(Alain Guyot)など、フランス語研究論文を調査して、彼の想像力論をワーズワースらロマン派の想像力論と一貫のものとして位置付け、ウィリアムズの想像力論はワーズワースらと共通の理解に基づくという根拠を見つけた。この成果の一部について、2022年5月にテキサス州ベイラー大学で開催の British Women Writers Conference にて “Helen Maria Williams and the Romantic Concept of the Imagination” の演題のもと口頭発表を行った。以上の検証作業の結果、ウィリアムズらの感受性の女性詩人たちとワーズワースらとの文学的親近性が明らかになり、想像力を社会改革に生かすというウィリアムズらの思想が内面化されたのがロマン派文学の本質であるという根拠を提供することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 田久保 浩	4. 巻 29
2. 論文標題 シェリーの “Mont Blanc” とヘレン・マライア・ウィリアムズ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田久保 浩	4. 巻 28
2. 論文標題 ロバート・メリーとメアリー・ロビンソン フランス革命と感受性の詩	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田久保 浩	4. 巻 44
2. 論文標題 Michael O'Neill, Shelleyan Reimaginings and Influence	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 イギリスロマン派研究	6. 最初と最後の頁 70-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田久保 浩	4. 巻 30
2. 論文標題 Review Kenneth R. Johnston Unusual Suspects: Pitts Reign of Alarm and the Lost Generation of the 1790s	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本シェリー研究センター年報	6. 最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 田久保 浩
2. 発表標題 シェリーの “Mont Blanc” とヘレン・マライア・ウィリアムズ
3. 学会等名 イギリス・ロマン派学会第47回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hiroshi Takubo
2. 発表標題 Helen Maria Williams and the Romantic Concept of the Imagination
3. 学会等名 2022 British Women writers Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------